

第84回 日文研フォーラム



日本近代文芸におけるゴシック風小説

－ 泉鏡花と谷崎潤一郎の場合 －

Gothic Fiction in Modern Japanese Literature :
Izumi Kyoka and Tanizaki Junichiro



リース・モートン

Leith Morton

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

日本近代文芸におけるゴシック風小説

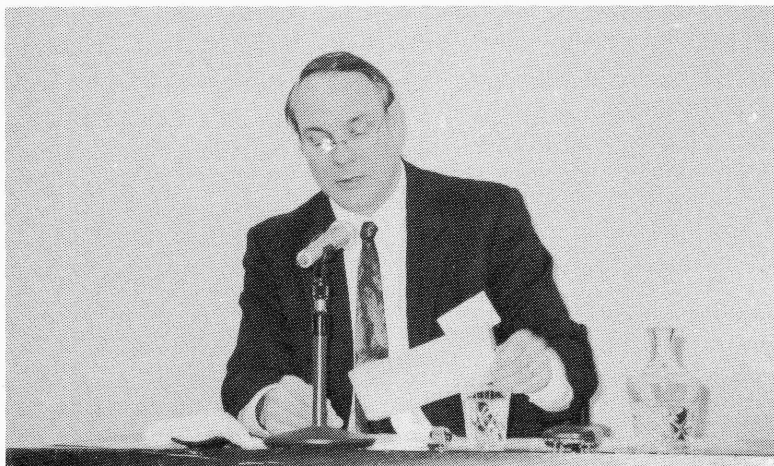
－ 泉鏡花と谷崎潤一郎の場合 －

Gothic Fiction in Modern Japanese Literature :
Izumi Kyoka and Tanizaki Junichiro

● 発表者 ●

リース・モートン
Leith Morton

オーストラリア・ニューキャッスル大学教授
Professor, University of Newcastle, Australia
国際日本文化研究センター客員教授
Visiting Prof., Int'l Research Center for Japanese Studies



1996年4月16日(火)

発表者紹介

リース・モートン

Dr. Leith Douglas Morton

オーストラリア・ニューキャッスル大学教授

Professor, University of Newcastle, Australia

国際日本文化研究センター客員教授

Visiting Prof., Int'l Research Center for Japanese Studies

1951年シドニー生まれ。1975年、シドニー大学（日本文学専攻）を優等で卒業。1976～77年、関西学院大学大学院で日本文学を学ぶ。1982年、シドニー大学大学院（日本文学専攻）修了。1982年、シドニー大学より博士号を取得。1979～86年、シドニー大学東洋研究学科講師。1987～90年、シドニー大学東アジア研究学科助教授。1992年よりニューカッスル大学現代言語学科教授として現在に至る。1992～94年、オーストラリア日本研究協会の会長。専門は近・現代日本文学。1996年1月から7月まで日本近・現代詩と散文の歴史と大正時代思潮の研究のため国際日本文化研究センター客員教授として来日。

主な著書：

Tales from East of the River, Rigmarole Books, Melbourne, 1982

Divided Self: A Biography of Arishima Takeo, Allen & Unwin Australia, Sydney, 1988

The Fox, Kumon Publishing Co., Ltd., Tokyo, 1989 (illustrated by Murakami Yukuo); Awarded the Sankei Newspaper Children's Literature Illustrated Book Prize, 1990; Published in the U.S.A. by Northland Publishing Co., Arizona, 1992

Seven Stories of Modern Japan (edited/translated), Wild Peony Press, University of Sydney East Asia Series, Sydney, 1991

Mt. Fuji: Selected Poems 1945-1986 by Kusano Shinpei (translated), Katydid Books, Oakland University, Michigan, 1991

An Anthology of Contemporary Japanese Poetry (edited/translated), Garland Publishing Inc., (Vol. 25, Garland Library of World Literature), New York and London, 1993

The Flower Ornament, Island Press, Sydney, 1993

この他論文多数。

ヨーロッパで、イギリスを中心にして小説にゴシック様式が現われたのは十八世紀でした。ファンタジーの様式としてのゴシックは、今日まで根強く続き、今では小説を越えて他の色々な芸術分野をも包み込むぐらいに広がっています。その中でも一番目立つのは映画でしょう。ゴシック風の映画で思い浮かぶのは、無声映画時代の『ノートルダムのせむし男』や、だいぶ後にヴィンセント・プライス主演で何本か作られた『博士の異常な愛情』シリーズなどです。ご覧になったことのある方なら、そのいかにもゴシック風な雰囲気を感じていただけていると思います。最も古典的な話の筋は、無実の主人公が城や僧院に三十年間も幽閉され、狂気、死、悪霊、お化けなどが頻繁に出て来ます。十八世紀のイギリスのゴシック小説家にとっては、フランス革命ほど格好の舞台は他にありません。ゴシック小説はほとんど常に誇張が激しく、メロドラマチックなものです。邪悪な坊主や不当な監禁などの描写に一抹の写実主義がうかがわれるのも事実です。ヨーロッパの一部では、その当時でも貴族は小作人たちに対してまだかなりの統制力を持っていました。そして、聖職者に対するあからさまな反感が異常に誇張されているのも、宗教改革前の中世のキリスト教会の行き過ぎに根を持つもので

あることは容易に推測できます。十九世紀も後半になると、ヨーロッパでは都市集中化が進み、とくにロンドンやパリはそれが激しく、古い封建体制が消滅するにつれ、ゴシック小説は再び盛んになります。ただ、世紀末の芸術運動においては、ゴシックは人間の心理の無意識の領域に足を降ろしました。産業革命によって生みだされた都市の勤労者の孤立感、お化けや悪霊、荒れはてたロマンチックな景色などが、往々にして、疎外された都市の住人の持つ心理的ストレスとユートピアの幻想の比喩であるという文学の一形式を生みだしました。ヨーロッパでゴシックは威厳を持つようになり、当時の名のある作家ならほとんど誰しもが一度はこのジャンルに手を付けてみました。十九世紀の幕が下りようとするところに翻訳されて日本の読者や作家へ大量に紹介されたのは、こういう作家たちとその作品だったのです。^①

ゴシックは、ロマンスの一樣式であるとか、ファンタジーを細密画のように詳しく描いたものとか、その他様々な言い方で定義されていますが、私は、広範囲の著述形式を包み込むように、ゴシックというものをできるだけ広義に解釈して二十世紀初頭の日本の小説家にあてはめ、西洋のゴシック様式の歴史との比較はせずに、日本の各作家に共通の文体とテーマ上の類似点に光を当てていきたい

と思います。歴史上、日本近代の小説が伝統的に西洋から影響を受けていることは否定できませんが、ここでは特にその追跡に力を注ぐことは避け、ゴシックという概念を作品解釈に活用する比較論的なアプローチを採用しています。

近代日本文学の中の美学の歴史を簡単にまとめた橋本芳一郎氏は、後には悪魔主義に発展していくデカダンの風潮を、明治日本にニーチェを紹介した人として著名な十九世紀末の思想家・高山樗牛（一八六八年生—一九〇二年没）から浪漫的な思想家兼詩人・北村透谷（一八六八年生—一八九四年没）と上田敏（一八七四年生—一九一六年没）までたどってみせました。世紀末のデカダンの文人として透谷と敏は、西洋におけるデカダンの文人のこともよく知っており、雑誌などの記事を書いて日本へ紹介しました。橋本氏は、美学上のこのデカダンの伝統が、次から次へと鎖のように影響し伝わって、永井荷風（一八七九年生—一九五九年没）や谷崎潤一郎（一八八六年生—一九六五年没）に至ってついに花咲く過程を再構築してみせました。橋本氏によると永井荷風も谷崎潤一郎もデカダン美学の後継者というわけです。^②デカダン美学といえますのは、日本文学、ヨーロッパ文学、英文学に共通してみられる世紀末の文学のある一面を意味しています。この一面は、従来の道徳や倫理感に拘束されないエロティシズム、罪の意識、そして

「美」の概念にこだわるものです。世紀末文学のこの一面は、従来の道德、とくにキリスト教道德に対して、ニーチェのような哲学者を指導者として起こった一般的な哲学的革命の一部を構成していました。ダーウィンの『種の起源』は、人間が理性よりも本能に振り回されるという点では動物と変わりがないことを暴く本として広く読まれました。この人間観は、小説の中で、性的情熱の動物的な描写をエスカレートさせることになりました。文学はまた、はばかりなくエロティックになり、性の表現は姦通、つまり罪深いエロティシズムと変態性に集中するようになりました。フランスでは、ゾラやモーパッサン、後にはピエール・ルイス、そしてイギリスでは、オスカー・ワイルドやアーネスト・ダウソンなどがこの傾向の代表的作家です。もちろん、ゴシックの影響は、江戸川乱歩や夢野久作などといった大衆文学に顕著ですが、私は彼らよりも少し前の時代に焦点を当て、テーマよりも文体から検討を始めていきたいので、橋本氏が描く影響の鎖も、こういう対照的な見方をする、少し異なった様相を見せるのではないかと思っています。デカダンの文体において鍵となる要素は、比喩、つまりメタフォアと語り手の視点です。文体の話になってきましたので、ちょっとここで、近代の文体の研究のための要因をはっきり設定した、野口武彦氏の『小説の日本語』という非常

に大きな影響力を持つ本をご紹介してみたいと思います。

野口氏の近代小説の研究は、彼自身が言うように、現代ではほとんど読まれていない作家、岩野泡鳴（一八七三年生―一九二〇年没）から始められています。

野口氏の分析によると、泡鳴こそ、自然主義運動を、それまでの小説が出るに出不然ないでいた従来の枠の外へ乗り越えさせた、小説技法上の根本的な突破口を作った作家なのだそうです。^③しかし、日本の小説をまったく新しい概念の詩的感覚に導いたのは泉鏡花だといえます。野口氏は、「比喩であることをすら越えた比喩」そして「文彩が文彩以上の何ものである」といって、鏡花の比喩と直喩の使い方が、別世界、超現実を感知させるほど見事に突飛で幻想的であるといいます。^④文彩というのは、文章の飾りという意味です。通常の比喩において、実在する喩えられるものを所喩、英語でテナー (tenor) といい、不在の喩えるものを能喩、英語でヴィークル (vehicle) といいますが、たしかに鏡花の比喩は、所喩を能喩に喩えるという図式をすっかりくつがえすことによって従来の言述の様式を越えています。

野口氏はまた、鏡花の小説に神話の色を帯びた別の言語空間を見いだしますが、それはまだ幼ない時に母を失った鏡花の不幸な少年時代から来るものであると言っ

ています。^⑤ 言い換えると、鏡花の別世界に棲む女怪、妖怪、お化けは、彼の心の中に本当に出没する悪霊に他ならないというのです。

さて、ゴシック小説にこれと同じような分析法をあてはめた人がいます。それはピーター・ブルックスといって、一九七六年に『メロドラマティック・イマジネーション』という本を書いた人で、ゴシック小説とは「超自然性探索の旅」の描写であり、白昼の自我、自己満足している心には説明できないある力の存在を再び主張するものであるといいました。^⑥ つまりゴシックは神の喪失に対する一つの反動であり、ロマンティックなあるいはポスト・ロマンティックな世界において神話を創るのは個人でしかありえない、そして、個人のエゴがゴシックの中心的価値であると断言し、そのために世界そのものは縮小してしまうか、エゴそのものが世界になるといいます。

泉鏡花は、近年、ゴシック小説の作家であるとよくいわれるようになりました。^⑦ そしてコーデイ・ポルトンが、「鏡花の初期の作品のセンセーションナリズムの大部分は、鏡花のメロドラマへの偏愛と、彼の取り上げる題材が驚くほど革命志向であることに起因しているといっている」と言っていますが、たしかに、鏡花の中に、メロドラマとマルクス主義との関連が見える、と言って言い過ぎであれば、

少なくともこの二つの言述様式を連想させる二つの考え方がつながっているように見受けられます。⁽⁸⁾

鏡花が文壇に最初のインパクトを与えたのは一八九〇年代で、初期の作品でも有名なのは一八九五年に書かれた『外科室』という作品です。この作品ではある外科医が、愛人である人妻の手術をすることになり、情事の発覚を恐れるあまりその人妻は麻酔を拒否します。遂に貴船伯爵夫人と呼ばれるその人妻は、手術台の上で外科医のメスを自らの胸に刺してしまいます。⁽⁹⁾ ドナルド・キーン氏は、『外科室』を「どうしようもなくメロドラマティック」と評しましたが、この作品は、日本の読者の想像力をがっしりとつかみました。ここで、ちょっと皆さんのご注意を引かせていただきたいのは、キーン氏が「メロドラマティック」という言葉を、意識して軽蔑的に使っていることです。⁽¹⁰⁾ 後ほど「メロドラマ」という言葉を肯定的に定義し直す見地もあることをご紹介したいと思います。さて、『外科室』へ戻りますと、大袈裟な誇張こそこの作品の魅力の根本にあり、日本の文芸評論家が、鏡花は文章技巧もテーマも、十八世紀から十九世紀へかけて人気のあった洒落本や草双紙に負うところが大きいと言っているのは注目に値すると思います。⁽¹¹⁾ また、鏡花の話の筋の出所として民間伝承を挙げる評論家もいます。⁽¹²⁾ 勝本清

一郎は、「封建末期の頽廢文学と文明開化文学との混血児が維新の幻影にとりつかれて、云々」といって、鏡花が西洋と日本の浪漫的かつ頽廢的な伝統の後継者であることを強調しました。⁽¹³⁾

鏡花は超自然の物語を数多く書きましたが、彼自身お化けや魑魅魍魎を信じていたらしく、そのために鏡花の作品は、よく似た技巧を使った有島武郎のような作家よりもはるかに西洋のゴシック小説に似通っています。⁽¹⁴⁾しかし、超自然的な妖怪が書かれているにもかかわらず、有島武郎の場合と同じように、読者は作者個人の心の風景をうかがい知ることができます。野口氏もこのことには注目を促しています。ゴシック小説と文体に関して、過剰性のメロドラマ的な使用法、つまり「修辭上の過剰性」を検討したブルックスの説はそのまま鏡花の小説に応用できます。私がここで強調しておりますのは、ゴシック表現様式の中のある一部分だけです。つまり、ゴシック小説の言語と、心理を描写するのに超自然現象を使う、その使い方です。しかし、鏡花やその他の日本の作家はゴシックから表現方法を借用しただけに留まっているなどというつもりはありません。彼らの人気を沸騰させた悪霊やエロティックな題材なども、元をたどればやはりゴシックなのです。鏡花の作品における過剰性は、「形式上の本質的なもの」であることは確

かです。実際、心理の内部の風景を描く上で、そのような過剰性がいかに有意義であるかを力説するメロドラマやゴシックの研究者はブルックスだけではありません。ファンタジーについて研究したローズマリー・ジャクソンは、「ゴシック小説以来、不思議なこと（英語でいうとthe marvellous）から奇怪なこと（英語では uncanny）へと徐々に移行している、つまり、ゴシック的恐怖物語リバイバルの歴史は、自我が生んだ恐れ¹⁵の認識および漸進的内向化の歴史である」と言っています。

「uncanny」つまり「奇怪なこと」という言葉をこの文脈で使用しているのは単なる思い付きではありません。フロイドが「ダス・ウンハイムリッヒエ」、英語では『The Uncanny』と題する有名なエッセーを一九一九年に出版し、「uncanny」という言葉に特別な意味を与えているからです¹⁶。ローズマリー・ジャクソンはフロイドの定義を「無意識の欲望と恐れを周囲に、そして他の人に投影する効果」と言い換えています¹⁷。フロイドは、奇怪な経験を抑圧されたコンプレックス、あるいは死に対する恐怖などの原始的な信仰に結び付けます。「これまで抑圧されていた幼い時のコンプレックスが何かの印象で再現されるような場合、あるいは、これまで克服されていた原始的な信仰がもう一度確認されるような場合に奇怪な体験が起こる」とフロイドは言います¹⁸。心理的過剰性、奇怪な過剰性という形を取り

ながら語り手の心の奥底にある不安を鮮明に映し出すという手法で、原始的な恐怖が描写され、心の風景に息吹が与えられている最もよい例は、鏡花の作品の中では『高野聖』なのではないかと思えます。

一九〇〇年に初版が出版されたこの作品は、ほとんど全編を通じて語り手の独白という形になっており、高名な僧、宗朝しゅうちょうがふとしたことで知り合った私を相手に物語を聞かせるという設定です。宗朝上人は、飛驒の山越えをやったとき、不思議な森の中で道に迷い、この世のものではないような恐ろしい生き物に次から次へ出くわしたあと、やっとのことで一軒の山家へ辿り着きます。この山家には、鏡花の言葉を使うと、唾か白痴のような少年と美しい女が住んでいます。一夜の宿を頼むと女は承知し、滝に導いて怪しく煽情的に体を洗ってくれますが、僧侶の身なので宗朝はぐっとこらえます。その間にも不思議な生き物が人れ替わりたち代わり寄って来ますが、女はそれを邪険にふり払います。しかしなぜか女は白痴のような少年にはやさしいのです。上人は、次の日、山家を出ますが、女への想いがつのってどうしようもなくなり、山家へ取って返します。その途中、昨日山家でちらっと会った親仁おやじに会います。親仁は女が超自然の生き物で、男を誘惑し、飽きると様々な動物に変えてしまうのだが、昨夜宗朝が助かったのは彼の優

しい性質のために違いないと話してくれます。上人はここで話を終えて行きずりの話相手である私から去っていき、この話は終わります。⁽¹⁹⁾

ストーリーは、旅人である私、上人、そして親仁という三者の語りが混ぜあわさり、二重三重に重なっています。このような複雑な語りの構造を好む傾向と、そして鏡花がこの作品で明らかに語り直している神話や寓話の使い方についてはこれまでも何度か取り上げられています。⁽²⁰⁾しかし、何よりも、鏡花の他の作品もそうですが、この作品が日本の読者に衝撃を与えたのは、彼の小説言語です。

鏡花の小説言語は、詩的で緻密であり、彼の描くイメージは、その速度と動きがまるで映画のようです。三島由紀夫は、鏡花のことを、「夢や超現実の言語的体験といふ稀有な世界へ踏み入っていた。」と言う一方で、修辞上の過剰性と心理上の過剰性をつないで、「彼の自我の奥底にひそむドラマだけしか追及しなかった。」⁽²¹⁾

ともいっています。⁽²¹⁾また、評論家の吉田精一氏は、『高野聖』について「読者が文とともに運び去られて、あと戻りが出来ない」といっています。⁽²²⁾そして、批評家の川村二郎氏は、「説話体とは、物語の世界が日常から遮断された仮構の別世界であることを強調するための表現方法である。物語の登場人物が、自己の見聞としてまた一つの物語を報告する。登場人物のおかれている場がすでに、日常の空間

とは別種の仮構空間であるわけだが、この空間の中にさらに新たな仮構が嵌め込まれる時、その新たな空間の、日常からの距離は、大幅に拡大することになる。」⁽²³⁾といひます。このコメントは、小説全般にあてはまるかも知れませんが、仮構の空間が言語で構築されるという考え方は、注目しておく必要のある要素だと思ひます。もし『高野聖』から特定の例をとつて考察してみると、鏡花が景色の描写をするとき、超自然なものへの恐怖というゴシック風な色調を与えているのがわかります。そしてその色調は、外界の現実と同じぐらい、内部の現実をも反映しているのです。ここで、『高野聖』の第八章、上人が飛驒の山越えの道中に、暗い森に入り込んで、頭の上の樹の枝から笠の上に何かが落ちてきたところを引用してみます。

鉛の錘おもりかとおもう心持ち、何か木の実でもあるか知らんと、二三度ふつてみたが付着くっついていてそのままには取れないから、何心なく手をやってつかむと、滑らかに冷りひやと来た。

見ると海鼠なまこを裂さいたような目も口もない者じゃが、動物には違ひない。不気味で投げ出そうとするとずるずるとすべつて指の尖さきへ吸いついてぶら

りと下った、その放れた指の尖からまっかな美しい血が垂々と出たから、吃驚して目の下へ指を付けてじっと見ると、今折り曲げた肱の処へつりと垂れかかっているのは、同じ形をした、幅が五分、丈が三寸ばかりの山海鼠。

あっけに取られてみる見るうちに、下の方から縮みながら、ぶくぶくと太っていくのは生血をしたたかに吸い込むせいで、濁った黒い滑らかな肌に茶褐色の縞をもった、疵胡瓜のような血を取る動物、こいつは蛭じゃよ。…ともはや頸のあたりがむずむずしてきた、平手で扱いてみると横撫に蛭の背をぬるぬるとすべるといふ、やあ、乳の下へ潜んで帯の間にも一疋、蒼くなってそツと見ると肩の上にも一筋。

思わず飛び上がって総身を震いながらこの大枝の下をいっさんにかきぬけて、走りながらまず心覚えのやつだけは夢中でもぎ取った。

何にしても恐ろしい、今の枝には蛭がなっているのだからとあまりのことに思つて振り返ると、見返った樹のなんの枝か知らず、やっぱり幾ツということもない蛭の皮じゃ。

これだと思う、右も、左も、前の枝も、なんのことはないまるで充滿。

私は思わ^わず恐怖の声を立てて叫んだ、するとなんと？　このときは目に
見えて、上からぼたりぼたりとまっ黒なやせた筋の入った雨が体へ降りか
か^②ってきたではないか。

この段では、景色の輪郭とともに自然界の基本要素そのものが恐ろしい吸血蛭
に変形されています。このシーンは、幻^{うつつ}か現^{うつつ}かわかりませんが、美しい女の姿を
借りて人の生き血を吸う魔性のものが棲む山家で上人を待っている危険を象徴的
に前触れしているのです。この女の吸血鬼のような性的渴望は、蛭という自然の
一部に変形されています。その言語は、見かけは現実的なようでも妖怪が恐ろし
さを増すにつれ底にあるゴシック風のファンタジーが透明になっていきます。文
体はリズムがあつて非常にめづかしいです。「ビクトリア時代の小説ではゴシックの
同化がきこえないため、現実的な主文の中に、もう一つの非現実的なテクストが、
カモフラージュされていたり隠れていたとしても必ず存在することがよくわかる」
といつてローズマリー・ジャクソンが言語表現におけるゴシック様式をビクトリア
時代の小説にあてはめてみせましたが、そのほとんど完璧な実践例をここに見る
ような気がします。^②

言葉を変えていうと、心理的におおげさな表現の裏にはもっと暗いモチーフがあるということです。これから『高野聖』からの引用を読んでもみますが、鏡花が描く世界の終焉のような情景は、作者が持っているといいたいところですが、少なくともこの物語の語り手を持っている深い不安感を暗示しています。フロイドの「uncanny」つまり「奇怪さ」という概念に少し手直しをしたヘレーネ・シシュールという人の説も鏡花の文章に適応します。シシュールは、「奇怪さに近親感がないのは、それが、置き換えられた性的な不安感であるばかりでなく、純粹なる不在である死との遭遇のリハーサルでもあるからだ」といっています。⁽²⁶⁾第九章の先に読みました引用部分のすぐあとに続く部分で、たつた今日撃したばかりの恐ろしい情景について上人が立ち止って考える場面を読んでもみます。

およそ人間が滅びるのは、地球の薄皮^{うすかわ}が破れて空から火の降るのでもなければ、大海が押しかぶさるのでもない、飛驒^{ひだのくに}国の樹林^{きはやし}が蛭になるのが最初で、しまいには皆血と泥の中に筋の黒い虫が泳ぐ、それが代^{だい}がわりの世界であろうと、ぼんやり。

なるほどこの森も入口ではなんのこともなかったのに、中へ来るとこの

とおり、もっと奥深く進んだらはや残らず立樹の根の力から朽ちて山蛭やまびるになっていよう、助かるまい、ここで取り殺される因縁らしい、取り留めない考えが浮かんだのも人が知死期ちしじに近づいたからだ、ふと気が付いた。⁽²⁷⁾

この時点で、語り手である上人はある種の悟りに達します。彼は自分の恐れを白昼にさらけ出してみせたのです。死ぬかも知れないという可能性をまっすぐ正視し、今見た世界の終末のような情景は、死との対決が生んだものだ、と一旦気づいてみると、先に進むために必要な力が内から湧いて来ます。鏡花はその次の文章で「そう覚悟が決まっては気味の悪いも何もあったものじゃない」と書いています。⁽²⁸⁾「覚悟」が決まったから恐怖に打ち勝ち前進することができたわけですが、「覚悟」という言葉は、真実を知るという意味でもあります。⁽²⁹⁾また仏教の「道理を悟る」という意味も含まれています。旅の上人が飛驒の森林に分け入る恐ろしい旅は、僧侶としての悟りへの旅でもあるのです。語り手を襲うゴシック的な恐怖は、彼自身の心理を内省してはじめて知覚されており、フロイドやシシュールの言う「奇怪性」にぴったりの実例と言えるでしょう。

『高野聖』では、ブルックスのいうメロドラマ的過剰性がこなれて和風のゴシッ

クになっていくようです。鏡花のテーマとテクニクは伝統的な江戸後期の読本よみほんを受け継いでいるようですが、鏡花の作品とヨーロッパのゴシック小説とは、表現方法への関心が並んだ線上にあることやロマンティックなファンタジーの使い方などから見て、ただよく似たジャンルに属するというだけではないほど近似しています。鏡花とエミリー・ブロンテのようなヨーロッパのゴシック作家とがなぜ共通の問題意識を持っているのかを探るのは大仕事ですが、二者が近似していることには疑いがないと思います。

鏡花の小説技巧は、あいまいさを見事に駆使します。旅の僧が語ったことはただの幻覚だったのか、それともこの超自然的な恐怖物語は、どうしてかはわからないけれども本当に起こったことを語ったものなのかは知るよしもありません。

野口氏は、「鏡花の小説言語にあっては、所喩（テナー）＝実在する喩えられるもの」と能喩（ヴィークル）＝不在の喩えるもの」とは互いに自在にその位置を変えるばかりでなく、一つに融即する：言語宇宙なのである。鏡花の小説言語は、この互換性原理にしたがって、現実と超現実との二つの言語秩序、二重の言語意味作用を持つ。」³⁰といっています。この引用は少しわかりにくいのですが、野口氏は、目の前にある何か（所喩＝テナー）を目の前にない他のもの（能喩＝ヴィークル）と比

較する際に、鏡花の小説では、その両者の境目があいまいになり、どちらも現実に存在しないものを比較したりしているので、意味が反対になっても差しつかえがないという事態が起こり、その結果、独特の超自然的雰囲気がかもしだされていると言いたいのだと思います。所喩（テナー）とか能喩（ヴィークル）という言葉は、一九三六年にイギリスの言語学者、I・A・リチャーズが比較的単純なアイデアを説明するために考案した言語学の専門用語です⁽³¹⁾。実世界のものと、別世界、夢の中の世界、またはファンタジーやイメージの中の世界のものを比較して、比較の対象が逆さまになったり、時には同一になったりするのは鏡花の小説の特徴です。言い換えれば、この意味のあいまいさは、鏡花の文体の基盤そのものが生むものであり、これこそ鏡花の作品の根本なのです。このあいまいさは、後期浪漫主義を自我について意識しながら探索してみれば必ず辿り着く近代特有の「不信の停止」をもたらします。（「不信の停止」とは、文学に使う言葉で、読者が作品を読むときに虚構の内容を一時的に真実として受け入れることを意味します。）

根本的に、ゴシックとはロマン主義の伝統から生まれた芸術探求の様式です。しかしロマン主義が日本文学に吸収されていった過程についてお話しするだけの時間はありませんので、またの機会に回させていただきますと思います。

また、谷崎潤一郎の初期の作品に見られるゴシック的な面についても深く掘り下げていく時間も今日はありませんが、ただ、谷崎の初期の作品にみられる独特な文体上の要素の中に、ゴシックと結び付けられるものがあるように思いますので、ここでちょっと簡単にお話ししたいと思います。

谷崎は、鏡花と比べてずっと意識的に心理小説を書いた作家です。初期の作品でさえ谷崎は、ペンから溢れ出る文章の彩あやや比喩をしっかりとつかんで操ることができているように思えます。谷崎を論ずるとき、よくオスカー・ワイルドが引き合いに出されますが、ワイルドと同じように谷崎は常に素材を手にとってコントロールしていますし、またワイルドと同じように自分のアイデアを表現するとき、様々な新しい方法をためらいなく試しています⁽³²⁾。ワイルドの代表作である『ドリアン・グレイの肖像』の中心となるモチーフは、芸術家と芸術の関係です。

芸術家は自分の芸術に蹴押され、ワイルドの文章には、芸術が芸術家を圧する力を表現するサド・マゾ的な比喩がちりばめられています。谷崎は、一九一〇年に『刺青』を書いたときはまだ二四才に過ぎませんでした。作家として成熟した最初の作品で、やはり明白にサド・マゾ的な隷従の比喩が見られます。

『刺青』は、多分皆さんご存じのことと思いますが、江戸時代に設定された筋は

単純そのものです。清吉という若い刺青師は、針で男たちを痛めることを喜ぶという人知れぬ快樂と、いつか光輝ある美女の肌へ己の魂を彫り込みたいという宿願を持っていました。ある日、江戸の深川で清吉は籠から女の足がのぞいているのを見ます。すっかりその足に惚れ込んだ清吉は、しばらくしてその足の主の娘に偶然出会います。これから芸者に出ようというその娘は清吉に睡眠薬を飲まされます。眠っている間に清吉入魂の女郎蜘蛛を背中一面に彫られた娘が眠りから覚めると、状況は反転して清吉ではなくその娘が主になっているという筋です。

『刺青』においては、『高野聖』のように、筋のテクストに平行する自然現象のテクストというものが一切ありません。谷崎の文体が作り出す絢爛として異様な雰囲気は、鏡花の超自然現象ないし心理現象とは全く違います。それは、語り手の声が明らかに皮肉っぽいからです。この意味で、谷崎の語り手は、立派に一人の登場人物として存在感を持っています。そもそも冒頭の「それはまだ人々が『愚か』といふ貴い徳を持つて居て、世の中が今のやうに激しく軋み合はない時分であつた。」という書き出しからして、鏡花の『高野聖』の語り手には見られない自己意識的な皮肉っぽさを見せています。⁽³⁴⁾『刺青』のゴシック的要素は、清吉の心理描写にもあり、話が展開していくにつれて明かされていく女の隠れた妻さにも

ありますが、単なるゴシック風の恐怖小説ではありません。なぜでしょうか。それは皮肉っぽい語り手が恐怖小説のすさまじさを読者に語りながらも少し距離をおくことによってある種のユーモアをほのかに感じさせるからです。劇的に残酷な話の筋は、明らかにサド・マゾ的心理を描きながら、『高野聖』にみられるコントロールのきかない夢の世界ではなく、作為をもって表現された欲望という安定した語りの枠組みの中でその役割を果たしています。清吉のサド・マゾ的偏執狂ぶりは、これから読みます引用によく現われています。

この若い刺青師の心には、人知らぬ快楽と宿願とが潜んで居た。彼が人々の肌を針で突き刺す時、真紅の血を含んで膨れ上がる肉の疼きに堪えかねて、大抵の男は苦しき呻き声を発したが、その呻きごえが激しければ激しい程、彼は不思議に云い難き愉快を感じるのであった。：

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己の魂を彫り込むことであつた。その女の素質と容貌とについては、いろいろの注文があつた。啻に美しい顔、美しい肌とのみでは、彼は中々満足することが出来なかつた。⁽⁸⁵⁾：

これは作為の透けてみえる心理描写で、そういう意味でゴシックは、表面に出ている、背景よりも前景に置かれていえると言えるでしょう。この作品の暗い副文脈は、かなり早いうちからはっきりと示される女の中のサディスティックな傾向に潜んでいます。これはまさに先程申し上げました「奇怪さ」と呼ぶべきものだろうと思います。

「これはお前の未来を絵に現はしたのだ。此處に斃れて居る人たちは、皆これからお前の為に命を捨てるのだ」

こう云つて、清吉は娘の顔と寸分違わぬ画面の女を指さした。

「後生だから、早くその絵をしまってください」

と、娘は誘惑を避けるがごとく、画面に背いて畳の上へ突っ伏したが、やがて再び唇をわななかした。

「親方、白状します。私はお前さんのお察し通り、その絵の女のような性分を持っていますのさ。⁽³⁶⁾」

その「奇怪さ」は、また女の背中彫りものが完成したときその全容を現わします。しかし、語り手がこの女の性質を先に予告しているので、読者には女の残酷さを目の当たりにしても特別意外だとは思いません。『痴人の愛』のナオミが譲二の作り上げたものであるように、この残酷さは清吉の作り上げたものだといわれるかも知れませんが、谷崎の自己意識の強い語り手は、様々な手法で最初からその可能性をほめかしています。

谷崎の小説には鏡花の小説同様に、人物の魂、そして世界そのものの描写の底に、同じような暗い要素があるのがわかります。その意味では二人の作家を結ぶゴシックの糸が見えると言ってもいいかも知れませんが、決して全く同じではないのです。谷崎の使うゴシック風の語りは、明らかに非常に意識的な使い方、多分これは鏡花よりも谷崎の方がゴシックの伝統をよく知っていたからではないかと思えます。谷崎も鏡花のように、草双紙の影響を受けており、また有島武郎のような日本のゴシック作家などの影響も受けていますが、谷崎は、一九世紀後期の西洋のゴシック作家たちを広く読んでいて、アイデアを借りるにしても鏡花よりよほどあからさまに借りています。そういう意味で、谷崎は形というものをわざとめて遊んでいます。これは初期の作品より後期の作品にはっきり見られま

す。大正時代の作家がこういう谷崎から受けた影響はあまりに大きく、ゴシックをロマンスの一様式にしか過ぎないとか、作家として好きなように使ったり捨てたりできる表現の一様式とみなすまでになりました。つまり、谷崎こそ、日本のモダニズムの基盤の一つとしてゴシックを確立した一連の作家たちの鎖の最後の輪なのです。

注

- 1 Camille Paglia 著『Sexual Personae: Art and Decadence from Nefertiti to Emily Dickinson』(Harmondsworth, Middlesex: Penguin books, 1992) と『ゴシックはイギリスのロマン主義伝統の一部と見られる』(ミッドセクス・ペンギン)。「Fantasy: The Literature of Subversion」(London and New York: Methuen, 1981) の中で Rosemary Jackson が『ゴシックをファンタジーの一枝葉と見る』と述べる(五三三ページ)。西欧のゴシックの研究書の代表的なものに、Mussell, Kay の『Women's Gothic and Romantic Fiction: A Reference Guide』(Westport, Connecticut: London, England: Greenwood Press, 1981) と Thompson, G. R. の『The Gothic Imagination: Essays in Dark Romanticism』(Washington: Washington State Univ. Press, 1974) などがある。また、一般的なゴシック小説論として、Victor Sage 著『The Gothic Novel』(Hampshire and London: MacMillan, 1990) がある。

- 2 橋本芳一郎『谷崎潤一郎の文学』桜楓社、一九六一年（改訂版）三〇六ページ。
- 3 野口武彦『小説の日本語』『日本語の世界十三』中央公論社、一九六〇年、一九〇〜三〇〇ページ。
- 4 野口武彦『小説の日本語』三六ページ。
- 5 野口武彦『小説の日本語』三九ページ。
- 6 Brooks, Peter『The Melodramatic Imagination: Balzac, Henry James, Melodrama and the Mode of Excess』(New York: Columbia University Press, 1985) 一六〜一八ページ。
- 7 泉鏡花をロマンチック作家と呼ぶ評論家は、西欧では Carpenter, Juliet の『Izumi Kyoka: Meiji Era Gothic』*Japan Quarterly* 31: 2 (Apr. - Jun. 1984) 一四〇〜一六ページ、Poulton, Mark Cody『The Grotesque and Gothic: Izumi Kyoka's Japan』*Japan Quarterly* : 3 (Jul. - Sept. 1994) 三三〜三六ページがある。
- 8 Poulton, Mark Cody『The Grotesque and Gothic』三三〜三六ページ。
- 9 泉鏡花『泉鏡花全集』第二巻、岩波書店、一九七一年、二〇六ページ。
- 10 Keene, Donald『Dawn to the West: Japanese Literature in the Modern Era』第二巻 [Fiction] (New York: Hold, Rinehart and Winston, 1984) 二〇〇ページ。
- 11 笠原伸夫「鏡花的美の方法」、日本文学研究資料叢書『泉鏡花』、有精堂、一九六〇年、五〇〜五二ページ。
また、吉田昌志「泉鏡花と草双紙」東郷克美編、日本文学研究資料新集十二「泉鏡花・美と幻想」有精堂、一九九二年、一七二〜一八六ページ。
- 12 松原純一「鏡花文学と民間伝承と」、日本文学研究資料叢書『泉鏡花』、二〇三〜二一六ページ。
- 13 勝本清一郎「鏡花の異神像」、日本文学研究資料叢書『泉鏡花』、四一ページ。

- 14 有島とゴシックについては、リース・モートン「有島武郎の初期文芸におけるゴシック風文体」、『有島武郎研究叢書第一集、有島武郎の作品(上)』、有島武郎研究会編、右文書院、一九五五年、一五〇～二〇六ページを参照。
- 15 Jackson, Rosemary 『Fantasy』二四〇ページ。
- 16 James Strachey と Anna Freud 訳および編集『The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud』第十七卷(London: The Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis, 1955' repr. 1986) 中のフロイトの「Das Unheimliche」と題するエッセー参照。二七〇～二八〇ページ。
- 17 Jackson, Rosemary 『Fantasy』二四〇ページ。
- 18 Freud 「The Uncanny」(*Das Unheimliche*)' 二四〇ページ。
- 19 泉鏡花『全集』第五卷、五四〇～五四九ページ。
- 20 鏡花とアジアの神話については、竹内泰宏「東洋的幻想と鏡花—アジアの中の日本文学—」、日本文学研究資料叢書『泉鏡花』、五〇～五五ページ。また、神話について Poulton, Mark Cody 「Metamorphosis: Fantasy and Animism in Izumi Kyoka」『Nihon Japan Review』第六卷、一九五五年、三〇九～三二〇ページ。鏡花の語りについては、笠原「鏡花的美の方法」、三〇九ページ参照。
- 21 三島由紀夫「泉鏡花」、『群像・日本の作家5: 泉鏡花』小学館、一九九一年、二五ページ。(初出: 一九六九年)。
- 22 三吉行雄「泉鏡花をめぐる一統『虚構』の意味」の中で引用された吉田精一「高野聖研究」、日本文学研究資料叢書『泉鏡花』三三ページ。
- 23 川村二郎「瞻視された空間—『春昼』」、『群像・日本の作家5: 泉鏡花』小学館、一九九一年、二七〇ページ。

- 24 泉鏡花『全集』第五卷、五二―四ページ。
- 25 Jackson, Rosemary 『Fantasy』二三ページ。
- 26 Cixous ^テ Jackson, Rosemary 『Fantasy』六ページに引用されている。
- 27 泉鏡花『全集』第五卷、五五ページ。
- 28 泉鏡花『全集』第五卷、五五ページ。
- 29 新村出編『広辞苑』第三版四九ページによると、「覚悟」とは、迷いを去り、道理をさること。
- 30 野口武彦『小説の日本語』三八ページ。
- 31 Oxford English Dictionary の「tenor」の項参照。
- 32 谷崎とワイルドの関係については、吉田精一「谷崎文学と西欧文学」、『吉田精一著作集第十卷…耽美派作家論』桜楓社、一九八二年、一七―七ページを参照。また、村松定孝「谷崎潤一郎と泉鏡花」、荒正人編『谷崎潤一郎研究…近代文学研究双書』八木書店、一九八三年、四九ページ参照。
- 33 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集』中央公論社、一九八二年、六―七ページ。
- 34 谷崎潤一郎『全集』三三ページ。
- 35 谷崎潤一郎『全集』四―五ページ。
- 36 谷崎潤一郎『全集』六ページ。
- 37 吉田精一「谷崎文学と西欧文学」二五―六ページを参照。また、大橋健三郎「谷崎とポオ」、荒正人編『谷崎研究』、四四―四六ページや、野口武彦「レトリックとしての通俗性―谷崎潤一郎『武州公秘話』」、千葉俊二編『日本文学研究資料新集…物語の方法』、有精堂、一九八二年、一五ページを参照。

発表を終えて

8年前に国際交流基金のフェローとして来日した折に、国際交流基金京都支部を会場に開かれた第7回日文研フォーラムに参加し、スーザン・ネイピア先生の発表を聴く機会がありました。今回は日文研に招かれて来日し、近代日本文学の研究に大変楽しい時を過ごしておりますが、同じ会場で開催された第84回日文研フォーラムでは私が発表する番となりました。

24年前に私は留学生として同志社大学で近代日本文学を勉強していましたが、その頃分からなかったことが日文研で研究することによって、今ではもう少し良く理解出来るようになったと思います。当時、京都は昔風な町だったという気がしますが、現在の京都はすっかり変わって明るい現代都市になりました。私の研究も見通しが明るくなって来たように思えます。

有難うございました。

Leish Morton

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊びー拳を中心にー」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像ー現実と幻想ー」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性ー恵信尼の書簡ー」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋ー都市社会の自由とその限界ー」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性ー猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りにー」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来了中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑮	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑯	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑰	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
⑱	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
⑳	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉑	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉒	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウィーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) J ürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐる－」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 －科举制度をめぐる－」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り － 平安朝文学の特質－」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 ー南蛮美術から洋学までー」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 ー井上靖文学における『陰謀』ー」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 ー俳句の可能性を中心にー」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6.5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6.6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験ー文学における日本人と上海」
66	6.7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見ー王朝文を中心にー」

67	6. 9. 13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6. 11. 15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6. 12. 20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1. 10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2. 14 (1995)	嚴 紹 璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3. 14 (1995)	王 家 驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4. 11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心に－」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7. 25 (1995)	崔 吉 城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9. 26 (1995)	蘇 徳 昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
78	7.10.17 (1995)	李 均 洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧①	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリューシナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1. 16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2. 13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3. 12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
84	8. 4. 16 (1996)	モーリス・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5. 28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学・日文研客員助教授) Mark Cody POULTIN 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6. 11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7. 30 (1996)	シルヴァン・ギニャール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9. 10 (1996)	ハーバード E・プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
89	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国 東北民族学院助教授・日文研客員教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰」

発行日 1997年 1月 25日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1997 国際日本文化研究センター

■ 日時

1996年4月16日(火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

